

“Pitee Renneth Soone in Gentil Herte.” : Chaucer 作品における ‘Pity’ と ‘Gentilesse’

安 藤 光 史

“Pitee Renneth Soone in Gentil Herte.” : ‘Pity’ and ‘Gentilesse’ in Chaucer’s Works

Mitsunobu ANDO

‘Pity’ is one of the most important virtues that Geoffrey Chaucer in his works often refers to as a quality indispensable to a man, especially to a ‘gentil man,’ a man of high rank and of ability. The Poet repeatedly uses this particular word, often in relation with the idea of ‘gentilesse,’ which is the generic name of various virtues necessary to a man. His favorite phrase : “Pity renneth soone in gentil herte,” which appears four times in all his works, is a good example. He emphasizes a quality ‘pity’ as a component of ‘gentilesse.’ *The Knight’s Tale*, *The Merchant’s Tale*, *The Franklin’s Tale* and others show good examples in which this quality plays the important part in order to develop their plots. Why does Chaucer often refer to ‘pity’ and insist on its necessity ardently? The Parson in *The Canterbury Tales* gives an answer to this question in his long and edifying preach. ‘Pity’ is the essence of Christ and His religion.

I

チャーサー (Geoffrey Chaucer, 1340?–1400) が、人間の「高貴 (Gentilesse) (=Gentility) ということ」を重くみて、その作品の中でしばしばこれに言及していることは、前稿「Chaucer の ‘gentilesse’ における二つの面」において指摘したとおりである¹⁾。彼はこの言葉にさまざまな美德 (virtues) の総称としての意味を持たせて使用しているのである。コグヒル (Nevill Coghill) などは、‘gentilesse’ をダイヤモンドに喩えて、‘truth’, ‘honour’, ‘knighthood’, ‘wisdom’, ‘humility’, ‘freedom’, ‘generosity’ などの美德は「優れたカットを施したダイヤモンドの小面」(facets of a well-cut diamond)²⁾であると、穿った表現を与えている。そういう見方をすれば、本論でとりあげる ‘pity’ (チャーサーの英語では、‘pitee’ もしくは ‘pite’) もまた ‘gentilesse’ という貴重なダイヤモンドを構築する小面³⁾のひとつである。しかも、チャーサーではそれは他のさまざまな徳目を圧倒してとりわけ重要視されるものである。チャーサー作品へのコンコードダンスを調べてみる⁴⁾、‘pity’ と ‘gentilesse’ とを何らかの形で関係づける用例の多さは群を抜いている。例えば、

Som drope of *pitee* thurgh thy *gentilesse*
(*KnT*, 920)

As gentil herte is fulfilled of *pitee*
(*MLT*, 660)

This *gentil* May, fulfilled of *pitee*
(*MerchT*, 1995)

Accepteth, lord, now of youre *gentilesse*
That we with *pitous* herte unto yow pleyne.
(*CIT*, 96-97) [Italics mine]

というような表現が非常に目につくのである。そういう表現の中でもひとときわ光を放つのが、

For *pitee* renneth soone in gentil herte.
(*KnT*, 1761)

「高貴な心には憐みの情がすぐに起きるもの」というフレーズで、チャーサーはこれが随分と気に入ったとみえて、「騎士の話」(*The Knight’s Tale*)以外の箇所でも三度用いている⁵⁾。ホワイティング (Bartlett Jere Whiting) の諺辞典⁶⁾を調べてみると、チャーサーのこの表現が真先に掲げられ、その影響の下で後代の作家によって ‘pity’ と ‘gentilesse’ とが切り離し難いものとして固ってい

く過程がはっきり読みとれるのである。

チョーサーは、'gentillesse'に言及する中で'pity'という資質に非常にこだわった。それはどのようにか。また、それは何故なのか。本稿では、彼の作品の示すところにしたがって、そういう問題を探ってみたい。

II

'Pity'という言葉の辞書の意味について調べてみる。『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*)によると⁷⁾、'pity'とは「憐み深い資質」であり、「慈悲(mercy)もしくは同情(compassion)を感じやすい性質」のことであり、さらに、「他のものの苦しみ、苦悩、不運によってひき起こされ、それを楽にしてやろうとする感情」のことだとある。他方、逆に、「憐みを他に起こさせる原因となるもの」の意味にも用いられる。つまり、ちょうど、聖アウグスティヌス(St. Augustinus)が、悲劇を論じて、「自分がそういう目にあう場合は『あわれ』と呼ばれ、他人のあわれに同感する場合は『あわれみ』と呼ばれる」⁸⁾と言っている、その「あわれ」と「あわれみ」に当る意味を'pity'という語は兼ね含んでいるわけである。本論では、「あわれみ」の意味での'pity'の用例を追って、'pity'と'gentillesse'の関わりを論じていく。なお、'pity'の派生語'pitous'や'pitously'も同様の扱いをする。また、同意語、類語等については、'compassion'、'mercy'、'ruth'、'sympathy'などが考えられるが、本稿では、これらも『オックスフォード英語辞典』、『中世英語辞典』(*The Middle English Dictionary*)、『チョーサー語彙集』(*A Chaucer Glossary*)等の定義を踏まえて、'pity'とはほぼ同意義の語としてとり扱うことにする。(ただし、'sympathy'の用例はチョーサーでは一例もない。)

さて、'gentillesse'の概念を構築するさまざまな徳目のひとつとしての'pity'に関してチョーサーはいかなる発言をのこしているのだろうか。まず、『カンタベリ物語』(*The Canterbury Tales*)の舞台に中世人の理想像として登場し、話合戦のしんがりに立ち天のエルサレムへの道を説く清貧の主任司祭(Parson)の言葉に耳を傾けてみることにする。彼はこの説教の中で、人間の高貴(gentillesse)ということに触れて、魂の高貴を忘れ、血筋、家柄の高さを誇ることは愚かなことだとし、唯一真の高貴とは、心にさまざまな徳を積み、キリストの子となることだという。また、そういう人には高貴しよしの徴(generale signes of gentillesse)が自ずと表われるものだと述べ、それは、悪を寄せつけず、放蕩を避け、罪のとりこになることなく、徳と礼節を求め、心を清く、寛大な心を持ち、何事にも度を越さず、善行を忘れないこ

とだというのである。(ParsT, 460-66)さらに、いまひとつの徳は人に親切(benigne)であることだとして、セネカ(Seneca)の言葉を借りて、「親切と同情ほど高貴な人にふさわしいものはない」(There is no thyng moore covenable to a man of heigh estaat than debonairetee and pitee. [ParsT, 467])と'pity'が'gentillesse'にはなくてはならない徳目であることを付け加えるのである。

もちろん、'gentillesse'をテーマにうたった短詩「高貴」(Gentillesse)の中でも、正義、誠実、真面目、寛大、魂の清らかさ、勤勉、正直などの徳目とならんで、'pity'の必要が説かれている。

This firste stok was ful of rightwisnesse,
Trew of his word, sobre, pitous, and free,
Clene of his gost, and loved besinesse
Ageinst the vyce of slouthe, in honestee;
(Gent, 8-11)

引用文中の'firste stok'とは、イエズス・キリストのことで、キリストこそ'gentillesse'の源泉であることこの詩の前連スソクでうたわれている。

チョーサーはこういう'gentillesse'観を、主としてボエティウス(Boethius)やダンテ(Dante)から学んだと言われているが、ボエティウスの*De Consolatione Philosophiae*やダンテの*Il Convivio*などには、この'pity'という資質のことは触れられていない。アリストテレス(Aristotle)にもない⁹⁾。'Gentillesse'の概念に'pity'という要素を盛り込んだのは、テリー・ジョウンズ(Terry Jones)も指摘するように、チョーサーの「非常に重要な付加」(one very significant addition)なのである。主任司祭に語らせているように(ParsT, 446-47)、肉体の強さも、知力も、どんな美徳も、'pity'という徳を持ち合わせなければ、すべて「潜在的な悪」(potential evils)になってしまう、とおそらくチョーサー自身も考えていたのであろう。だからこそ、「憐みに寄せる嘆きの歌」(*The Complaint unto Pity*)という'pity'をテーマにした一篇の詩を物して、'pity'が失われて、'truth'が危機に瀕する世を慨嘆もしたのである。

III

では、実際にチョーサーの作品の中で'pity'という徳目がどのような役割を演じているのか。『カンタベリ物語』の中のいくつかの話の例にとってみてみることにする。

「騎士の話」(*The Knight's Tale*)は、「総序の歌」(*The*

General Prologue)の中でも “a verray, parfit gentil knight” (*Gen Prol*, 72) と讃えられる高德の士が語り手であるだけに、高貴な話の内容が期待されるものである。国王 Theseus は凱旋する途中、一群の女達の憐れな訴えを聞き入れ、彼女達の夫の命を奪ったという Creon をテーベに打つ、その際二人の若い騎士 Palamon と Arcite を捕虜として連れ帰るが、この二人は獄中から Theseus の娘 Emily をひと目見るや激しい恋に陥ち、いずれが彼女を恋人とするかを争うようになる。歳月を経て Theseus の城を逃げ出した二人は山中で Emily をめぐって死闘をくり広げる。狩りの途中、偶然にも現場を通りかかった Theseus は Palamon と Arcite だと知ると、両人に死刑を言い渡すが、女王はじめ宮廷の女官達の懇願を憐れに思い、寛大にもトーナメントの勝者に Emily を妃として与えるという決定をする。……という話であるが、この Theseus という国王が、真に ‘gentillesse’ を身に付けた人物として描かれている。勇気もあり騎士精神にも欠けるところがない。そして、何より彼の「憐れみ深い」(pitous) 性格が強調されているのである。

Theseus の ‘pity’ の資質は、物語の二箇所明らかに読みとれる。ひとつは、凱旋途上で夫を殺された女達の訴えを聞き入れるところである。馬上の Theseus に女達が、

Have mercy on oure wo and oure distresse!
Som drope of pitee, thurgh thy gentillesse
Upon us wrecched wommen lat thou falle.
(*KnT*, 919-21)

と涙ながらに訴えると、彼はさっと馬から飛び降りると彼女達に心も破れんばかりの同情を示したというのである。

This gentil duc down from his courser sterte
With herte pious, whan he herde hem speke.
Hym thoughte that his herte wolde breke,
Whan he saugh hem pitous and so maat,
That whilom weren of so greet estaat.
(*KnT*, 952-56)

この「同情」がきっかけとなり、Theseus の Creon 征伐が行われ、Palamon と Arcite を捕虜にする、という具合に話が展開するのである。いまひとつの箇所は、この二人の騎士に死刑を宣告した Theseus が、女王を始めとする女官達の悲しみを憐れに思い、宣告を取り下げるとこ

ろである。このときの女達の光景を見るのは「この上なく憐れ」(Greet pitee [*KnT*, 1751]) で、ついには Theseus の心も緩んだというのである。

... at the laste aslaked was his mood,
For pitee renneth soone in gentil herte.
(*KnT*, 1760-61)

そして彼自からが、密かに心のうちで「慈悲の心を持たぬ君主に禍いあれ」(Fy! upon a lord that wol have no mercy [*KnT*, 1773-74]) とつぶやきさえするのである。二人の若い騎士に対するこのときの彼の「慈悲」が Emily をかけたトーナメント、Arcite の不慮の死という物語の新しい展開の発端となっているわけである。このようにみても、「騎士の話」では、‘pity’ という徳目が物語をすすめるひとつの源動力となっていることに気付くであろう。

「貿易商人の話」(*The Merchant's Tale*) は、年老いた騎士が若いきれいな女房を貰って、憂き目を見るという笑い話である。騎士 January (1月) は60歳を越えて、不均合にも20歳にも満たぬ美しい娘 May (5月) を娶る。短かい行く末を、世継ぎをもうけ、美しい妻と楽しく生きようと夢見てのことであった。この騎士の家には Damian という若い従者がいて、彼はこの May を見るとたちまち心を奪われ、恋の病で床に伏ってしまう。そうとは知らぬ January は妻に Damian の看病を命ずる。「心優しい」(gentil) May は自分に心を寄せて苦しんでいる男に「憐れみ」(pity) を感じ、なんとか楽にしてやろうと考えるのである。

... this fresshe May
Hath take swich impression that day
Of pitee of this siké Damyán,
That from hire herte she ne dryve kan
The remembrance for to doon hym ese.
(*MerchT*, 1977-81)

May はすでに Damianこそ自分の真の恋人だと心に決めているのである。ここまで描いてきて、語り手は、「ほら御覧なされ、心の優しい人はすぐ憐れみをもよおすものでしょう」(Lo, pitee renneth soone in gentil herte! [*MerchT*, 1986]) という言葉を挿入するのである。さっそく「この心優しき May は、憐れみに満ちた心で」(This gentil May, fulfilled of pitee [*MerchT*, 1995]) ペンを取り二人だけの逢瀬を約束する手紙を認める。

……という筋の運びになる。このように、「貿易商人の話」においても‘pity’が物語の展開上見逃せない役割を果たしている。「騎士の話」をすでに知っている聴衆は、語り手の May に対する“Lo, pitee renneth soone . . .”という詠嘆には、失笑を禁じえないであろう。そういう効果のねらいがここにはあるだろうし、また、May の‘pity’がここで働かなければ、結末の大爆笑——January の目前(?)で堂々とこの兩人が浮気をする——はあり得ないのである。

「郷土の話」(*The Franklin's Tale*)は、‘gentillesse’のことにかけては自信満々、他人に物は言わせないという語り手による‘gentillesse’の物語である。騎士 Arveragus と Dorigen は幸せな結婚をするが、暫くして夫は戦さの旅に出る。留守をあずかる Dorigen は心も破れんばかりの淋しがりやで、友人の慰めも一向に通じない。そこへ以前から彼女を密かに恋していたという Aurelius という騎士の徒者が甘い言葉をかける。もとより貞操堅固な Dorigen ではあるが、Aurelius の悲しみよを見てほんの冗談のつもりで、海岸のごつごつした黒い岩を取り除くことができたらあなたのものになってもよい、と約束する。もちろん、とうてい実現不可能のことと知っていて Aurelius の熱をさますための約束であるが、彼の方は必死で、魔術師まで連れ出してついには本当に海の岩を消してしまうから大変、……という話であるが、この話でも‘pity’という資質が物語の動きに随分と大きな役割を果たしている。

まずこの話のヒロイン Dorigen から始めよう。彼女は多分に‘pity’を持ちあわせた女性として描かれている。物語の冒頭、宮廷愛の約束にのっとり Arveragus は誠心誠意 Dorigen につかえているが、彼女は Arveragus が高潔な騎士であることを知った上、彼の苦しみに「同情」して結婚を決意するのである。

. . . she . . .

Hath swich a pitee caught of his penaunce
That pryvely she fil of his accord
To take hym for hir housbande and hir lord.
(*FranklT*, 738-42)

彼女の「同情」しやすい性格は、次に Aurelius から求愛されたときの彼女の行動への伏線となっている。Aurelius を恋人として受け入れる気持はさらさらなのにもかかわらず、彼に対する「同情」から、心にもない約束をして、結果、彼の心を弄ぶことになるのである。彼女はこのとき Aurelius に、「あなたが余りに憐れに訴えるので」(Syn I you se so pitously complayne [*FranklT*,

991]) と言って、黒い岩の件を持ち出すのである。このようにまず事件の発端は Dorigen の‘pity’という資質なのであるが、さらに話を混乱させるのは魔術師の登場で、彼もまた恋に苦しむ Aurelius に対する「同情」から岩を消すという難題に憑かれたように取り組み、あわや Dorigen の危機という状況をつくりあげてしまうのである。

This subtil clerk swich routhe had of this man [i.
e. Aurelius]

That nyght and day he spadde hym that he kan
To wayten a tyme of his conclusioun ;
(*FranklT*, 1261-63)

このように話をもつれさず働きをするのが‘pity’であれば、またこのもつれを解くのも‘pity’の力である。

魔術師の力添えを得て、いよいよ願いがかなえられると Aurelius は喜々として Dorigen に会うが、約束を破ることは絶対にならないとする夫 Arveragus の言い付けで泣く泣くやって来た彼女を見ると、一度に「大きな同情心」(greet compassioun [*FranklT*, 1515]) が起きるのである。そして、憐れに思う気持ちから軽蔑すべき欲望を捨て、Dorigen を自由にしてやる決心をするのである。

. . . in his herte he caughte of this greet routhe,
Consideringe the beste on every side,
That fro his lust yet were hym levere abyde
Than doon so heigh a cherlyssh wrecchednesse
Agayns franchise and alle gentillesse.
(*FranklT*, 1520-24)

Aurelius が、もし約束を守ったのだからと、ここで自分の権利を主張すれば、悲しい結末は必定であっただけに、彼の‘pity’という資質が悲劇を救ったと言える。

以上、『カンタベリー物語』からいくつかの話を取りあげて‘pity’の果す役割の大きさを調べてみたが、その一端はうかがえたものと思う。

IV

では、一体このようにチョーサーが‘gentillesse’に不可欠の徳目として‘pity’という資質にこだわるのは何故なのか。もう一度主任司祭の話に耳を傾けてみよう。

主任司祭のする話というのは、キリスト教信者の救霊には欠かすことのできない告解の秘跡についての大説教である。その内容は、「痛悔」(Penitence)と「告白」

(Confession)と「償い」(Satisfaction)の三つの部分に分けられ、七大罪源(Seven Deadly Sins)の精微な分析を踏まえ、告解の秘跡を解説するものである。そういう説教の中で、主任司祭は、‘gentillesse’がイエズス・キリストの本質であると説き(*ParsT*, 153-54)、また‘pity’こそキリストの徳であることを幾度もくり返しているのである。

例えば、われわれを「痛悔」へ導くひとつの方法はキリストの受難を思うことだと語る箇所、聖バーナード(Seint Bernard)の言葉を引用して、キリストが善良な人々を憐んで流された涙を忘れるな、と説くのである。

Whil that I [i.e. Seint Bernard] live I shal have remembrance of . . . his teeres whan that he weep for pitee of good people
(*ParsT*, 256)

そして、さらにこの主任司祭が「痛悔」の部を以下の言葉でしめくくっていることの意味は大きい。

For soothly oure sweete Lord Jhesu Crist hath spared us so debonairly in oure folies, that if he ne hadde pitee of mannes soule, a sory song we myghten alle synge.
(*ParsT*, 315)

即ち、こうして今われわれが罪から救われて在るのはイエズス・キリストの「お情け」(pitee)で、もしそれがなかったら、われわれは嘆きの歌をうたわなければならないことになっていただろう、というのである。‘Pity’こそキリストの本質である、ということがはっきり打ち出されている箇所である。

また、七大罪源のひとつ「邪淫」(Lechery)を分析する中で、姦通の罪を犯した女の例を挙げて、「ユダヤの古い掟」(the olde lawe of God)によればこの女は石もて死刑に処せられるところであるが、「憐みの掟」(law of pitee)である「イエズス・キリストの掟」(the lawe of Jhesu Crist)によって、以後身を清く保つことを誓わせ、慈悲深く許されたと述べている(*ParsT*, 889)。ここにもキリスト教が‘pity’を旨とする宗教であることが明言されているのである。

七大罪源の「吝嗇」(Avarice)——主任司祭の説明だと、正当な必要もないのに所有物を保存し、しまいこんでおくことで、自分の持っていないものを欲がる「貧欲」(Covetousness)と区別される——の罪から人を救うのも「慈悲」(misericorde)であり「同情」(pitee)である

という。主任司祭によれば、「慈悲」とは他人の不幸に対して人の心が動かされる、その力のことで、その「慈悲」について「同情」がおこり、その「慈悲」の慈善行為を遂行するのだというのである。そして、イエズス・キリストは、まさにこの「同情」を通じてわれわれを地獄の責苦からお救い下さり、また、贖罪によって煉獄の責苦を減じ給うたのである、と主任司祭は‘pity’が魂の救済にいかに関与しているのかを説明するのである。

さらに、「償い」(Satisfaction)に関しても‘pity’の働きは少なからぬものがある。「償い」の方法には、「施物」(Alms)と「身体による償い」(Bodily pain)の二種類があるというが、前者の中に、「心の痛悔」(contricion of herte)や「精神的にも肉体的にも人が必要としているよき忠告や慰めを与えること」(yevynge of good conseil and comfort, goostly and bodily, where men han nede)とならんで、「隣人の貧困に同情すること」(to have pitee of defaute of his neighbors)が挙げられているのである(*ParsT*, 1029-30)。

このようにみえてくると、キリスト教がいかに‘pity’という徳を重くみているのか、また、何故‘pity’の徳が重くみられなければならないのかがよくわかる。主任司祭が自から説くように、真の‘gentillesse’が、究極的には、血筋とか家柄を越えて、貧しきものも富めるものも、イエズス・キリストの歩まれた足跡をたどり彼の似姿となることによるのみ達成されうるものであるとするなら、人生という長い巡礼の途中でときには冗談を言ったり、ふざけたりしてみせるジョーサーではあるが、やはり、中世人として教養と節度を十分持ちあわせた敬虔なクリスチャンジョーサーであってみれば、‘pity’という徳目を作品の中で執拗にうたい込んでいるわけも理解し難いものではない。

〈注〉

1. Cf. 拙論、「Chaucerにおける‘Gentillesse’の二つの面」『愛知工業大学研究報告』第16号A(1981), pp.13-19.
2. Nevill Coghill, *Chaucer's Idea of What is Noble* (Presidential Address 1971: The English Association, 1971), p.13.
3. John S. P. Tatlock and Arthur G. Kennedy (ed.), *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to the Romaunt of the Rose* (Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1963)の‘pity’, ‘pitous’, ‘pitously’の項参照.
4. 本稿におけるChaucer作品からの引用はすべてF. N. Robinson (ed.) *The Works of Geoffrey Chaucer*

- (2nd ed. : London : Oxford University Press, 1974)
に拠った。
5. Cf. *SqT*, 479, *MerchT*, 1986, 及び *LGW*, 503.
 6. Cf. Bartlett Jere Whiting (ed.) *Proverbs, Sentences, and Proverbial Phrases from English Writings Mainly before 1500* (Cambridge, Mass. : The Belknap Press of Harvard University Press, 1968) の P243 'Pity runs soon in gentil heart.' の項。
 7. Cf. *OED* の 'pity' の項。
 8. アウグスティヌス, 『告白』(「世界の名著」14 ; 東京 : 中央公論社, 昭和51年), p.107.
 9. Terry Jones, *Chaucer's Knight* (London : Weidenfeld and Nicolson, 1980), p.120. また, この点に関しては, Joerg O. Fichte, "The Cler's Tale: An Obituary to Gentilesse," in *New Views on Chaucer* (Denver : A Publication of the Society for New Language, 1973), p.13. にも触れられている。
(受理 昭和58年1月16日)